３　花　　き

項　　目	作　　業　　内　　容
	（今月の作業のポイント） ○施設花きの高温対策 ○シンテッポウユリの露地栽培管理と収穫 ○シクラメンの施肥管理 ○ハボタンの育苗 ○デルフィニウムのほ場準備 ○ユーカリの施肥管理
（１）施設花きの高温対策	施設栽培では高温障害を受けやすいので、換気扇等を利用した強制換気を実施し、日中の温度上昇を極力抑える。寒冷紗による遮光も効果があり、50～75％遮光を目安とする。遮光資材の展張は施設外や開放した施設内の肩から肩への平張りの効果が高い。展張時間は概ね 10 時から 16 時とする。トルコギキョウやばらなどでは、葉や花弁の焼け防止のため必ず遮光する。 かん水は夕方、または朝夕行い、日中の暑い時期のかん水は出来るだけ控える。日中萎れが見られる場合は、細霧または葉水を与える。 高温、乾燥時にはハダニ等、害虫の被害が多発する傾向があるため防除を徹底するが、高温時は薬害発生のリスクが高くなり、また身体への負担も過大となるので、朝夕の気温の低い時間帯に行う。 作業は出来るだけ朝夕に実施することが望ましいが、日中の作業に際しては、熱中症防止のため、空調服の着衣や早めの休憩、十分な給水等に心掛ける。
（２）シンテッポウユリの栽培管理と収穫	７月中旬頃からは早生系品種の収穫期となる（写真１）。日中に採花すると花弁に焼け症が発生する可能性があるため、特に晴天時の採花は気温の高くない朝８時頃までに終了する。切り花は、直射日光が当たらないよう収穫クロスなどに包み、できるだけ早く水上げし、調整した後に冷蔵庫内で保管する。採花の適期は 写真１　収穫間際のシンテッポウユリ

項　　目	作　　業　　内　　容
	開花４～５日前で、蕾が白味を帯びる前の緑の状態である。 　なお、シンテッポウユリは他のゆりに比べ生育にばらつきがあり、採花期間が長くなるため、葉枯病の防除を徹底する。
（３）シクラメンの施肥管理	７月はシクラメンの花芽形成期であり、植物内の窒素濃度が高すぎると花芽の形成が遅れる原因となる。このため７月下旬より液肥の窒素濃度を 30 mg/L（ppm）に落とし、葉色に注意しながら生育をやや抑え気味に管理する。ただし、リン酸とカリは十分に与える必要があるので、含有比率の高い置き肥を施用する。さらに、夏場はカルシウム欠乏が出やすいため、カルシウム剤を２週間間隔で 10 月頃まで継続して散布する。 　また、11～12 月に開花する花の花芽分化は７～８月に完了するが、マッチ棒の大きさ以上に発達した花芽では 25℃以上の高温で伸長抑制や生育阻害が起こりやすくなる。晴天時には 50～70％の遮光資材を展張し、換気を十分に行うことで施設内の昇温防止に努める。遮光による照度不足は葉や葉柄が軟弱になる原因であるため、鉢の間隔を広げ受光面積を確保する。
（４）ハボタンの育苗	年末出荷向けは７月中旬～８月上旬には種し、は種には 200 穴のセルトレイを用いる。は種が遅れると十分な葉数を確保できなくなるので注意する。 　25℃程度が発芽適温であるが、それ以上の高温では発芽が抑制されて不揃いになるため、黒寒冷紗などで遮光する。発芽後は、徒長防止のため遮光を中止する。 　また、高温期は胚軸が伸びやすく腰高の苗になりやすいので、子葉が展開した時期（は種後５日目頃）にわい化剤を処理する。 　ポット上げの時期は、は種後 20～30 日（本葉２、３枚頃）を目安とし、それまでは週１回程度液肥を施用する。
（６）デルフィニウムのほ場準備	６月で収穫を終えたデルフィニウムは、放置すると病害虫の温床となるため早期に除去する。その後のハウス内にはソルゴーをは種し、土壌改良を図る。除塩を兼ねた栽培目的でもあるため、は種後約 50 日でソルゴーを抜き取り、ほ場外に持ち出す。
（７）ユーカリの施肥管理	施肥が遅くなると芽の生育が秋まで停止せず、出荷が遅れるため、７月中には施肥を終了する。

（作成　農林水産研究所）